ISSN 0388－5569
VOL. 11 No. 2
（通巻32号）
1990. 6

Library News

山口大学附属図書館報

目次

工学部特殊文庫「旧徳山海軍燃料廠移管図書」について　梶返昭二……1
越氏塾余談　白水完治……3
附属図書館（総合図書館）の在り方について……4
システム開発ニュース……6
平成2年度附属図書館関係各種委員会委員名簿……10
寄贈図書……10
人事異動……11
日　誌……12

工学部特殊文庫「旧徳山海軍燃料廠移管図書」について

梶返昭二

終戦後2年経った昭和22年（1947年）の秋の頃である。当時の宇部工業専門学校（工学部の前身）工業化学科の教官達に、まことに耳よりな情報がもたらされた。米軍の爆撃で灰燼に帰した軍需工場の旧徳山海軍燃料廠（その跡地に、現在出光興産徳山製油所などがある）の防空壕内に、物理・化学や工学に関する専門書、雑誌類が放置されており、早急に救出保護を要する状態にある、との内容である。

その知らせを受けた工業化学科の教官（村田淳、大河原信等）は、学生の運転するジープに乗って、早速現場に駆けつけた。焼けただれ赤錆びた鉄骨の残骸が未だ残る広い工場内の地下壕に案内された彼等は、かび臭いにおいの充満した薄暗い壕内を見て狂喜した。何と、喉から手が出そうな、化学関係の叢書類や、バックナンバーの揃った貴重な内外の雑誌類が、理工系単行本類と一緒に整理され、累々と積み重ねられてあるではないか。歴史の浅い専門学校で蔵書や文献類に乏しく、またそれらを購入する余裕など全く無かった当時の彼等にとっては、まさに宝の山に遭遇した心地であったという。どのような手続きを踏んだのかさだかではないが、再度学校のトラックとジープを仕立てて、学生等に手伝ってもらって、理工系関係のもの全てを、宇部まで運んだ。その時ジープを運転したのは現工学部厚生主任の鎌田頼行で、当時宇部から徳山までの国道は未補装のガタビシ道で、やけに遠かったことが、特に印象に残っているとのことである。これらの図書類は、機械科棟内の仮図書室に大事に収納された。

壕内の湿気や水もれにより、損傷のひどいものも少くなかったが、イギリス、ドイツ、アメリカ各国化学会発行の学術雑誌で創刊から大戦直前までのバックナンバーをはじめ、文献抄録誌やハンドブック類などが、ほぼ完全なかたちで揃っていた。これらは、今日まで息長く利用されている。ちなみに、それらの主なものを列挙する。

〔学術雑誌類〕

イギリス化学会発行：Journal of the Chemical Society, Vol. 15 (1862)-1940；前誌，Memoirs of the Chemical Society, Vol. 1 (1841)- 3 (1845)；前誌，Quartenly Journal of the Chemical Society, Vol. 1 (1849) - 14 (1861).

ドイツ化学会発行：Berichte der Deutschen

Chemischen Gesellschaft, Vol. 1 (1868) - 74 (1941).
アメリカ化学会発行：Journal of the American Chemical Society, Vol. 1 (1878) - 61 (1939).
Verlag von Julius Springer : Zeitschrift für Angewante Chemie, Vol. 6 (1893) - 23 (1910).

〔抄録誌〕
ドイツ化学会発行：Chemisches Zentralblatt, Vol. 27 (1856) - 112 (1941); 前誌, Pharmaceutisches Centralblatt, Vol, 1 (1830) - 20 (1849); 前誌, Chemisch-Pharmaceutisches Centralblatt, 21 (1850) - 26 (1855).
アメリカ化学会発行：Chemical Abstracts, Vol. 1 (1907) - 35 (1941) ; Decennial Index, Vol. 11 - 20, and Vol. 21 - 30.

〔叢書類〕
ドイツ化学会発行：Gmelins Handbuch der Anorganischen Chemie, 1926 - 1941.
B. Prager and P. Jacobson : Beilsteins Handbuch der Orgnischen Chemie, Bd. 1 - 29; Erstes Ergänzungswerk, Bd. 1 - 31.
F. Ullmann : Ullmann, Enzyklopädie der Technischen Chemie, Bd. 1 - 10.
E. W. Washburn : International Critical Tables, Vol. 1 - 7.

翌昭和23年（1948年）1月には、当時の六三制の新学制の実施に伴い、山口県内の旧制高等学校や専門学校を統合して、総合大学を設立する案が具体化した。そして、田中龍夫山口県知事を会長に、各高等専門学校長、県会議員、市長、市会議長および各種団体の長を網羅して、山口総合大学設立期成会が誕生した。宇部市においても、時の市の有力者が名を連ねた宇部工専大学昇格後援会が発足し、大学工学部として、要求された最低の研究施設や、実験設備の充実に、資金を提供するなどの、組織立つた支援がなされたが、このとき、既に校内に格納されていた旧徳山海軍燃料廠からの移管図書約5500冊（当時の宇部工専保有総図書数の⅓を占めていた）は、宇部工専の大学昇格の審査に、大事な備品（蔵書）として、大いに貢献したという。

なお、これらの学術文献類が、当時の宇部市内の化学工業会社の研究開発に役立つ貴重な参考資料であることが知られるにいたり、昇格後援会長でもあった宇部興産（株）の中安閑一の寄付により、これらを保管する鉄筋コンクリート建物の書庫一棟（264m²）が建てられた。これは当時における工専唯一の不燃性建物であった（学生等のサークル室として、今なお現存している）。

あれから43年経ち、工学部もこの秋から、いよいよ大学院工学研究科博士課程が発足することとなったが、現図書分館長土屋晉の言によると、失般設置審査委員の視察を受けた際、工学部の蔵書として、それこそ前世紀中頃からの第1巻よりバックナンバーの揃った一流外国雑誌類が、高く評価されたという。

実際、革表紙で装われたＪＣＳ前誌 Quarterly Journal of the Chemical Society 第1巻（1849年）などをひもどく時、140年も昔の論文が、今なお生きた姿で目にふれるさまは、筆者にとってはまさに驚きで、今日の化学の発展をもたらした長い歴史の重みに、いささか深い感慨を覚える。また古い“Berichite”などは、文献調査の際、有名化学者の肖像写真や伝記を見い出す楽しみも与えてくれる。まさに一流の化学雑誌類である。それにしても、当時の徳山海軍燃料廠に、これ程の学術雑誌や抄録誌などが、よくも蒐集されたものだと、感嘆の念を禁じ得ない。このような旧制帝大並みの資料を集めたことで、当時の海軍燃料廠の技術研究担当者のレベルの高さがあらためて推測される。

なお余談だが、20年位前に、徳山市の図書館より、所有権を主張してそれらを返すように依頼があったが、時の分館長村田淳は、その申し出を拒否した。

（登場人物の敬称は省略）

（山口大学名誉教授、元工学部長）

越氏塾余談

白水完治

平成に改元の頃の事、調べ物にて図書館を訪れると、既に先客あり。見事なる白髪の蘓永氏、建売住宅のチラシと地図を片手に何やら悪戦苦闘の御様子。「今日はまた異なる事を、地図帳相手に何事ならん？」氏曰く「防府市東三田尻とは何処なりや調査中」「これはまた懐かしき名前なり。」小生かつて三田尻女子高校の裏手、東三田尻一丁目なる所に借家を求めて住まい居り。彼の地鋳物師（イモジ）の手前なり」氏重ねて問う「三田尻の上ノ丁（カミノテフ）とは何処なりや？」。

「小生不勉強にて古の地名を知らず。三田尻立丁なる地名は聞き及べども、上ノ丁は知らず。彼の地には良き知り人在り。現地にて調査する事如何なりや」氏曰く「了」也と。

昭和天皇大葬の日、氏の共をして、その昔弟子入し世話になりし東三田尻の老指し物師の親方を訪ぬ。喜寿近き親方髪黒々と恙無く流石に建具、指し物師の事とて、手掛けし近在の家の事なら問取りから建具の格子の面取り具合迄、知らぬ事の無しの活字引。健康の素と称する上等の茶を馳走になりながら、大正・昭和始の頃の事、三田尻すてんしょの防府駅に変わりたる事の話をあれこれと拝聴に及ぶ。

ややあって本論、「上ノ丁は何処也や？」と問うに、東京オリンピックの歳に書かれたる町内会の地図を、唐木の応接台に開ろげて曰く「上ノ丁はカミノテフに非ずウエノテフ也。天神に向かう通りがタテテフ（立丁）、横にウエノテフ（上ノ丁）ナカノテフ（中ノ丁）アオキテフ（青木丁）在り。上ノ丁は我が家の前の通り也」。蘓永氏は古の記録を頼りに重ねて問う。「東詰めとは何処の辺也や？」親方曰く「何時の記録也や？」「幕末御維新前の頃也」

しばし沈思黙考。流石の親方も丁髷時代となると手が出せぬらしい。折角上ノ丁迄はつきとめたものを…思い余って横から言葉を挿む。「寺子屋の跡は何処ならん。華浦小学の前身、越氏塾跡也」「寺子屋の跡は、汝ら車を停めし我が木小屋の所也。今を去る事廿余年の昔教育委員会なる者此地に寺子屋在りと高札を掲ぐ。風雪曝され、板朽ちて今は無し」。此空き地、上ノ丁・立丁の交わる所にてまさしく東詰め。まごう事無き越氏塾跡也。蘓永氏と顔を見合わせ思わずにんまり。調べに来た甲斐の在ったと言うもの也。

冬の日は早西に傾きぬ。親方の案内にて御町内を一巡りす。敗戦後は占領軍の命令で、何でもかでもメートル表示。己の足にて確かめると、往古の間口何間何丁先は身体が教えてくれる。

巡りての後、丁重に礼を述べて親方の許を辞す。

戻りの車の中、「で蘓永さん、結局越氏塾はそれからどうなったんですか？」「一旦、船頭町に引っ越してから、華浦小学校に受け継がれて行くんですがね、ここで火災に逢って蔵書は全部燃えてしまうんですよ。たまたま貸し出していたか何かで難を逃れた本が三冊程あるんですが、それ以外は全部灰になりました。一冊が山大図書館に在ります。それがこの前お見せした蔵書印の本です」。「惜しい事をしたものですね。昔から盗人は一抱え、火事は丸焼と、失う物が大きいと言いますが、それにしても三冊とは…」

そんな会話を交わしながら、十五年程も前の東三田尻の借家の事を思い出していた。位置は今日確かめた越氏塾の西隣、境に大きな杏の木が植えられ、路地に面して枝振りの良い大きな松が一本あった。入る時家主の親父さんが、「とにかく古い家です。それに空き屋にしてたもんで荒れていますから、良く掃除して下さい。雨漏りする所は瓦の間にトタンを挟んで置きました。化け物は出ませんが新婚さんにはどうですかネ」と、何ともすざましい古屋である。荷物を入れようと押し入れを開けると、そこには先住店子がおられて鼠の巣。これを追い出し片付け始めると、中から古い本が何冊か出て来た。朽ちかかった表紙をめくると、四書五経の類らしい。内容には全く興味は無いが、中身の紙は和紙で充分生きている。風呂の焚きつけにするには、いささか恐れ多いし、襖の下張りにでも使おうと段ボールに放り込んで置いた。

あの古本はどうしたろうか？三度の引っ越しで棄ててしまったろうか？いや確か書棚の一番下に入れっぱなしのはずだ。本には何やら大きな蔵書印が押してあったような気がする。家に帰ると早速に書棚をひっくり返して見る。少々黴臭い表紙の無い本が何冊か出て来た。

蘓永氏の目録作りの際、蔵書印の写真撮影でファインダーを通して覗いたから、記憶はしっかりしている。記憶を頼りに調べて行くと、そこに越氏塾印の角印があった。はやる気持ちを押さえに押さえ、蘓永氏へ電話を掛ける。「今越氏塾の印がある本を見つけました。書名は重刻国語。いそぎ真贋の程を判断して下さい」。氏は「越氏塾蔵書は表に、朱にて蔵書番号を記入しています。何の何番と書いてありますか？」。ちぎれかかった表紙には、肉太の文字で八十番丙六番天と記されている。「本物でしょう。事の子細は明日に聞きます」。

明くる日の昼、図書館にて松本氏をも交えて事の顛末を述ぶ。越氏塾跡は今日空き地にて、差し物師田中政秋氏所有也。隣地東三田尻一丁目六の二十五に一冊の書あり。「重刻国語」越氏塾の角蔵書印を有す。彼の書火事に遇わざるは、風呂場横に鎮座ましましたる水神様の御陰也。鼠の害に遇わざるは、書に述ぶる忠孝（チューコウ）の徳也。げに有り難きは蔵書を持ち出したる御仁也。返納せざるは罪也と言えども、彼が為に書は後の大災を避く。丸焼け前の一抱え、一番の誉れは本盗人にあり。百年の埃を払い糸切れを綴り直して書を山口大学の図書館に納む。かつて肩を並べし旧友の書と、「重刻国語」は何を語りしや。低き陽の書庫に差し込めり

越氏塾余談　後日の為、記し置くもの也。

（農学部附属家畜病院助手）

附属図書館本館（総合図書館）の在り方について

－資料の効率的な利用をはかるために－

前号巻頭文に、理学部小国教授『学術雑誌及びＣＡ』が掲載され、図書館員として大変面白く読ませていただきました。研究者の悩みの種、資料・情報を得るための努力、研究費の不足、私費による負担など、率直に述べておられました。この小文は、それに関連して書いたものです。

＊

昭和45年、附属図書館本館（中央館）が吉田地区５部局の分館を統合して設立されてから20年の歳月が経過しました。一度できあがった組織（体制）あるいは仕事は、どうしても硬直化し固定化してしまい、時代の変化や利用者の要求に即応することが難しくなってしまうものです。殊に、今日のような多様化した社会・情報化社会にあっては、更に困難であると思われます。これは、単に図書館のみにとどまらず、大学の教育や研究、また事務機構の在り方についてもいえるのではないでしょうか。ともかく、ひとつの節目ですので全体的な見直しをする必要があると思われます。

＊

「図書館は大学の心臓である」といわれ、大学の教育・研究のための重要な支援機関です。本学の図書館はその機能を果たしているでしょうか。

資料（文献）数の増加と資料費の高騰、これに対応して研究費が増えないというジレンマは、どの研究者もかかえていることと思われます。文部省は各大学に外国雑誌購入費を配分していましたが、学術審議会の「答申」を受けて医学・生物学、理工学、農学及び人文・社会科学の分野ごとに拠点校（センター館）を指定し、資源（資料）の共同利用を目的とするとともに予算の効率的運用を図るようになったことは周知のとおりです。今後一般研究費（校費）が急増することは困難でしょう。また、一定の私費を研究のために注ぎ込むことは、研究者として当然のことでしょうが、小国教授が言及されているように、個人の経済的負担が重くなるばかりで、これにも限度があります。資料購入経費の見直しを行い、研究費の効率的な運用を図ることが

当面できる最低限の方策でしょう。

岡山大学薬学部の大森教授が、「ある研究テーマのために必要とした文献の（中略）半分以上が岡山大学に無い」（岡山大学附属図書館報「楷」NO.10）と述べられていますが、まさにそのとおりで、もはや一大学で充分な資料を揃えることは不可能な時代になっています。昭和59年から63年までの５年間、本館から他大学へ依頼した文献複写は毎年２千件平均、図書の現物貸出依頼は80件平均となっています。医・工学部分館への利用を含めると、本館（山口キャンパス５部局）の文献（資料）依頼度はかなり高いパーセンテージになると思われます。

近年の学問研究の多様化、学際化、細分化、そして一大学の資料の充足度の低下は、必然的に全国的なレベルでの「資源の共有」という理念を一層実際的に押し進めることを要求しています。図書館相互利用のネットワーク化は、ますます発展してきています。これをさらに進展させていくためには、まず、学内の資料収集・共同利用の調整をはかることから始めなければなりません。全国レベルでの相互利用は、この学内レベルでの体制づくりがうまくいってから、はじめて有効なものとなるといえるからです。

もちろん、学内の整備は、全国ネットのためにだけ行うものではありません。これまでに述べてきた状況に対処するために、また、他の研究室の資料は利用しにくいとか、退職までは研究室に資料をしまい込んでしまうとか、研究費が乏しいのに重複購入が多いとかいった悪環境を少しづつでも改善するために、何とか資料の効率的な収集及び共同利用を促進をしていく必要があると考えられるのです。

ここで、少し例をあげておきますと、研究室購入図書冊数は、昭和57年度の21,820冊から下降し続け、昭和62年度には18,160冊となっています。それにもかかわらず、『日本近代思想大系』（全24巻）など重複購入の図書は随分あります。この他、比較的古い本で本館や他の研究室が所蔵しているのに改めて別に購入されることもよくあります。一方、購入雑誌数は、ほとんど平行線をたどっていますが、やはり重複誌もあるのが現状です。

誤解があったらいけませんから断っておきますが、重複購入や分散化が全くいけないというわけではありません。難しいことですが、「調和のとれた集中と分散」の在り方を目指すのが大切だということなのです。大体、研究に必要な資料の数に限りはなく、手元にかかえられる資料の数は限られています。しかしながらまた、本当にいつでも必要としている資料の数は、そう多くはないはずです。つまり、頻繁に利用する必要最低限の資料だけを手元に置くことにし、たまにしか利用しないものや一度目を通して大一次的な利用の済んだものは図書館に積極的に集中して共同利用する姿勢をとることにすれば、より多くの種類の資料がより多くの人に利用できるということになるのです。特に、全集・大系の類は、高価で利用者の範囲も広いので、図書館にこの予算項目を設け、網羅的に収集することを考えてもよいのではないでしょうか。また、雑誌に関しても、相互利用の全国的なネットワークに乗っていることですし、思い切って、外国雑誌やバック・ナンバーからでも集中化を検討してみてはどうでしょうか。既に、化学系の雑誌は全面集中化されていますし、経済学部の雑誌も製本が済めばバック・ナンバーとして図書館に置くかれるようになっています。

医学部・工学部分館では、既に全雑誌の完全集中体制を作っています。経緯はさまざまでしょうが、分散によるメリットよりも集中によるメリットのほうが大きいというコンセンサスが得られたから実現したのだと思われます。最初は、資料が手元から遠ざかって利用が不便になることなどの理由から、簡単にはいかなかったことと推察されます。でも、一旦そうしてみれば、必要な資料は（たとえ専門外のものでも）図書館に行けば必ず利用できるし、他大学の文献もよりスムーズに入手でき便利なものであるというのが実際のところではないでしょうか。

小国教授が、「山口大学の理工科系で不利なのは、医・工学部が宇部地区にあり、山口キャンパスと離れていることにより、学術雑誌の共同利用ができない」ことであると言われています。つい最近のことですが、ある学生から『細胞工学』を購入してもらえないかという希望がありました。調べてみますと、この雑誌は工学部分館で所蔵していることがわかり、その学生

には、学習用雑誌の購入費は限られておりハイそうですかと購入するわけにはいかないので、所属の研究室で購入してもらうようにするか、それができなければ工学部分館を利用することですねと回答したことがありました。この雑誌が図書館でなく研究室で所蔵していたとしたら、彼はどうしたでしょうか。この二つのことから、あるアイデアが浮かびました。キャンパスが一つになることは無理ですから、それぞれが必要とする雑誌のコンテンツ・シート・サービス（外国雑誌については、『カレント・コンテンツ』である程度は間に合うと思われますが）を図書館間で行なうことによって少しでも共同利用に近い体制にもっていけるのではなかろうか、と思ったのです。

図書館は、資料が重複して購入されることのないようにし、どんな資料がどこにあるのかを明らかにし、そして、より多くの資料がより広く利用されるために活動する組織です。本館でも、附属図書館運営委員会や本館図書委員会が、予算の配分・運営等について協議を重ねていますが、図書館をもっと活性化し、大学の教育・研究の発展により一層寄与できるためにも資料の効率的な運用についての方策も打ち出してほしいと思います。図書館は、これまで利用者研究を充分にしてきたとはいえません。利用者もまた図書館を積極的に活用しようとしてきたとはいえません。それが今日、図書館と利用の乖離を生んでいるのだと思われます。図書館の仕事は一種のサービス業ですから、利用者の動向や要望を幅広く把握することが図書館と利用者を結びつける第一歩と思われます。そのためにも、利用者サイドと図書館サイドは、図書館の在り方についてもっとコミュニケーションを図り、お互いに理想的な図書館を構築すべきではないでしょうか。

*

今回は、学術資料、それも主として一次資料の効率的な利用について図書館の果たすべき役割を述べてきました。高額二次資料、図書館のインテリジェント化（情報ターミナル）、学習図書館・保存図書館としての機能、留学生用資料の問題等には触れることができませんでした。

（整理係　横山茂樹）

システム開発ニュース

平成元年８月にコンピューターの模様替えをし、それに伴い今以上の使い易いシステムにするため、従来のシステムの見直しを始め検討・開発を行なった。

今回は図書の複本の管理をシステム化することと、和雑誌の誌名のヨミ（トレーシング）をローマ字からカナに変更することをメインテーマに掲げて、特に図書管理システムに於ては大幅な改善を行ない、それに関連する閲覧、検索等の周辺サブシステムの改善も合わせて行なった。

その期間中のプログラムの作成及び修正作業や従来のシステムで構築したデータを新しいシステムに乗せ替えるための移行作業、また、ヨミ（トレーシング）データの修正作業等の諸作業を日常の業務処理を止めることなく実行することは、各サブシステムともかなりの時間と労力を費やすことになったのではあるが、この度その作業もほぼ終えることができ稼働するに至った。

ここでは、改善したシステムの内、特に図書館の利用者に関係の深い図書及び雑誌の検索サブシステムについて主に報告することにする。

上記に少し触れてあるように、図書管理サブシステムの改善及び和雑誌のヨミのカナ化をしたことに付随して、各図書検索、雑誌検索システムの機能のアップも計った。

どちらの検索も従来のシステムと比べると、画面展開は大きく変わるところはないが、利用者が検索するうえで、より使い易く、より速くを目標にして基本から考え直し次のように改善を行なった。

1.　操作性の向上

検索語の入力は、日本語の場合従来はそのまま「カナ」でタイプして入力するという方法で

あったが、利用者の中には、「ローマ字」でタイプして入力した方が良いという人もおり、ローマ字でカナ入力ができないかという声も多数あった。図書館においてもそのことについて、以前から話題には上ってはいたが実現するまでには至らなかった。

そこで、今回のこの機会を利用して改善することになり、上記の２つの入力方法を利用者が選択してできないか、また利用者によって一つの検索語に対する入力の仕方がまちまちであり、これをどういうふうに包括するかを館内で検討した。

まず、ローマ字カナ変換入力については、後の項で詳しくは述べるが、現在のコンピューターの容量及び検索語のインデックスの作成等の関係で、検索語のインデックスは半角（１バイト）文字で作られ、なおかつ日本語は「カナ」で作られている。

そこで、入力されたローマ字をどのタイミングで「カナ」に変換するかということが問題となり、ローマ字カナ変換のテストプログラムを作成してテストを重ねたが、利用者に提供するまでには至らず、考えた末に、コンピューター本体が既に持っている漢字変換機能を利用してローマ字カナ変換をさせることにした。

この方法も完全に満足できるものではないが、このコンピューターでは一番良い方法と思われるし、少し使って慣れれば利用に耐えられると判断した。

ただし、この変換文字はあくまでも全角（２バイト）文字であるため、そのままでは検索語インデックスの文字と合わない。そこで、プログラム内部で全角文字の「ひらがな」「カタカナ」は半角文字の「カタカナ」に、また、全角文字の英大文字・英小文字は半角文字の英大文字にそれぞれ変換して、検索語が格納されているインデックスを参照して検索することにした。しかも、利用者が入力した検索語の中の空白やハイフン（－），カンマ（,），ピリオド（.）等の記号はプログラム内部で無視して、できるため多くの利用者の入力のクセを一元化することで同一のヒット率になるように工夫した。即ち、ハイフン（－），カンマ（,），ピリオド（.）等の記号は空白と同じ扱いとした。

検索語の入力項目は、図書の場合は、書名，ワード，著者名，分類，件名の５つ、雑誌の場合は、誌名，ワードの２つに分かれ、従来の全部の検索語の中から順に絞り込んでいく方法とは根本的に違い、必要な検索語をそれぞれの項目に入力して最後に掛け合わせ（ＡＮＤ）をする方法をとっている。また、それぞれの検索語入力項目に入力した検索語に対して即座にそのヒット件数を表示するので、利用者が効果的な検索をするために入力する検索語の選択の目安にもなるし、検索にかかる時間の短縮にもつながる。その上、それぞれの検索語で前方一致検索が可能で、利用者があらゆる角度から、また入力の仕方をあまり意識せずに利用できるように考えて開発を行なった。

2. 検索語

1. の操作性の向上もさることながら、検索のスピードアップを計ることもこのシステムの重要な改善目標のひとつであり、そのためにはもっと大きなコンピューターにする必要があるが、このことはすぐにはどうこうなるものではなく、図書館としては現在のコンピューターの環境の下で努力するしかなく、いかに効率良く、いかに速く検索するためにはどんな方法が最良かを検討した。その検索の課程に於て、少なくとも利用者が入力した検索語に対するヒット件数だけでも早く知らせることができないか、ということが議論にのぼった。このことは、ひいては操作性の向上にも結びつくことになる。そのためには、検索語のインデックスの作り方が最大のポイントとなると思われる。

検討の結果、検索語のインデックスマスターはできるだけ分けて１つのマスターのレコード件数を減らし、入力する検索語入力項目を分けて、個々の検索語でそれぞれのインデックスマスターを参照する方が検索のスピードアップにつながるということで意見が一致した。

そこで、図書は、（書名の冒頭から空白をつめて作成）インデックス，ワード（書名の単語から作成）インディクス，著者名（著者名の冒頭から空白をつめて作成）インデックス，分類（図書の主題を表す番号から作成）インデックス，件名（図書の主題を表わす言葉から作成）

インデックスの五つに分け、雑誌は、誌名（誌名の冒頭から空白をつめて作成）インデックス，ワード（誌名の単語から作成）インデックスの二つに分けることにし、それぞれのインデックスに対応してその検索語の件数を格納するカウントインデックスを構築することにした。それにより、利用者が検索語を入力したときに、まずその検索語のカウントインデックスを参照してそのヒット件数を即座に表示し、利用者に早く知らせることができる。また、各インデックスの検索語は前項でも述べたように記号等は無視して作られており、そのことも検索語のヒット率向上に寄与していると思われる。

ただし、まだ問題点が無いわけでなく、例えば著者名が「中島一郎」という人がいたとすると、この場合の検索語は「ナカシマイチロウ」なのか「ナカジマイチロウ」なのか利用者が判断することが難しい。このように濁点，半濁点の取扱についてどうするか。これは今後館内で議論する材料となるであろう。少なくともこのシステムでは2回検索する必要がある。

3. 実際の検索の仕方

実際に利用者がこの検索システムを利用する場合の操作方法について簡単に説明する。

(1) 図書

① 検索したい図書の書名，ワード，著者名，分類，件名をそれぞれの検索語入力項目にタイプし、リターンキーを押すと、その入力した検索語に対するヒット件数が表示される。

② 必要な検索語を入力後、ＡＤＶＡＮＣＥキーを押すと、複数の項目に検索語を入力した場合は、この時点から検索語の掛け合わせが始まる。ヒット件数が20件以内のときは自動的にタイトルの簡略表示へすすむ。（→2画面）

20件以上のときはヒット件数を表示するのでそれを見て再検索するかタイトルの簡略表示へすすむかを自分で選択し画面の指示に従って操作する。

また、検索語が1つの場合でヒット件数が1000件以内であれば自動的に次のタイトルの簡略表示へすすむ。（→2画面）

③ タイトルの簡略表示においては、図書の複本管理システムのため1冊毎の配架場所情報や貸出状況は見ることができないので、必要があれば表示されたタイトルの番号をタイプし、リターンキーを押すことにより書誌事項の全部や1冊毎の情報を見ることができる。

(2) 雑誌

① 図書と同様にそれぞれの検索語入力項目に必要な検索語をタイプし、リターンキーを押すと、その入力した検索語に対するヒット件数が表示される。

② 必要な検索語を入力後を、ＡＤＶＡＮＣＥキーを押すと、図書と同様に検索が始まり、複数の検索語が入力された場合、ヒット件数が20件以内のときは自動的にタイトル選択画面へすすむ。（→2画面）

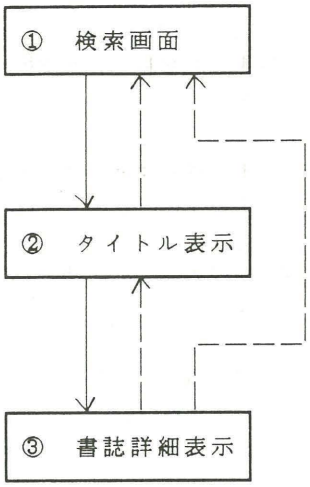
20件以上のときはヒット件数を表示するのでそれを見て再検索するかタイトル選択画面へすすむかを自分で選択し、画面の指示に従って操作をする。

また、検索語が1つの場合でヒット件数が1000件以内であれば自動的に次のタイトル選択画面へすすむ。（→2画面）

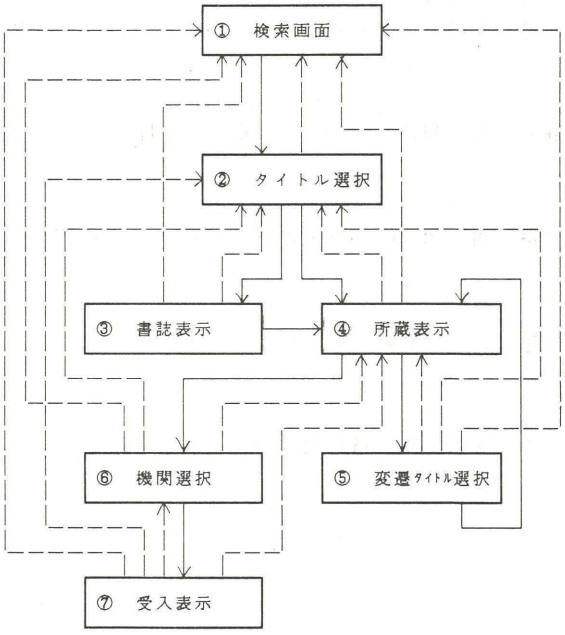
③ タイトル選択画面から書誌詳細表示や所蔵表示へは、画面の指示通り、ファンクション（ＰＦ）キーや表示番号をタイプし、リターンキーを押すことにより画面展開をする。

4. 検索の流れ

(1) 図書検索の流れ



(2) 雑誌検索の流れ



以上、検索システムについて簡単に記述しましたが、紙面の関係上詳しく報告することはできません。特に検索の仕方については、検索の手引が用意してありますので、実際に図書館に来て触れて見て下さい。なお、図書検索は6月4日から、雑誌検索は2月19日から開放しています。また、検索の仕様は随時改善等により変わることがあります。

(参考係　吉光紀行)

平成２年度附属図書館関係各種委員会委員名簿

（平成２年６月１日現在）

◇　運営委員会

◎印は委員長

◎古　賀　秀　男（館長）
中　澤　　淳（医学部分館長）
土　屋　　晉（工学部分館長）
柴　田　勝　二（人文学部）
井　上　三　朗（人文学部）
伊　東　　斌（教育学部）
重　岡　　徹（教育学部）
瀧　口　　治（経済学部）
中　田　範　夫（経済学部）
小　宮　克　弘（理学部）
君　波　和　雄（理学部）
福　本　哲　夫（医学部）
中　川　浩　二（工学部）
鹿　江　雅　光（農学部）
平　尾　重太郎（農学部）
小　杉　健　三（教養部）
谷　口　　仁（教養部）
森　松　光　紀（附属病院）
松　村　澄　子（医療技術短期大学部）
藤　本　幸　雄（工業短期大学部）

◇　本館図書委員会

◎古　賀　秀　男（館長）
澤　谷　昭　次（人文学部）
浅　見　洋　二（人文学部）
伊　東　　斌（教育学部）
重　岡　　徹（教育学部）
瀧　口　　治（経済学部）
中　田　範　夫（経済学部）
原　　純一郎（理学部）
内　藤　博　夫（理学部）
鹿　江　雅　光（農学部）
平　尾　重太郎（農学部）
光　岡　征　夫（教養部）
西　口　　毅（教養部）
辻　　武　夫（事務部長）

◇　医学部分館図書委員会

◎中　澤　　淳（分館長）
福　本　哲　夫（基　礎）
森　松　光　紀（臨床）
佐　田　英　明（助構基礎）
小　田　裕　胤（助構臨床）
松　村　澄　子（医療短大）

◇　工学部分館図書委員会

◎土　屋　　晉（分館長）
藤　満　達　朗（機械）
池　田　　攻（資源）
右　田　たい子（工化）
深　田　三　夫（土木）
長　　康　雄（電気）
谷　口　隆　雄（生産）
大佐々　邦　久（化工）
田　中　正　吾（電子）
中　川　浩　二（建設）
栗　山　　憲（共通）
藤　田　武　男（工短）
松　崎　浩　司（工短）

寄贈図書

入谷仙介（人文学部教授）
　頼山陽　梁川星巌　入谷仙介注　　岩波　1990（江戸詩人選集　第８巻）

影山純夫（教育学部助教授）
　狩野芳崖　　京都国立博物館　1989

大徳寺の名宝　　京都国立博物館　1985
古面の美　　京都国立博物館　1980
草間彌生　　北九州市立美術館　1987
近代の仏画　　板橋区立美術館　1984

桒原昭徳（教育学部助教授）
“騒がしい学級”の授業指導－小学校低学年の学習集団づくり－桒原昭徳著　　ぎょうせい　昭和62
“学級の歴史づくり”の理論と方法　桒原昭徳著　　東方出版　1982　（現代学習集団研究13）
学級における授業の成立　桒原昭徳著　　明治図書　1982　（現代授業論双書　36）
小学校授業における「学習規律」の実態　桒原昭徳編著　　山口大学教育学部　1988

小倉興太郎（工学部教授）
無機化学概論　小倉興太郎著　　丸善　1990

安部一成（山口大学名誉教授）
国際化時代の日本経済　石垣健一　瀧口治　箱田昌平編著　　晃洋書房　1990
（安部一成先生山口大学経済学部退官記念出版）
マルクス・ケインズ・新古典派　利岡彰三　中尾訓生　板垣有記輔編著　　晃洋書房　1990
（安部一成先生山口大学経済学部退官記念論文集）

人事異動

〔配置換〕（2．4．1）
中島冠守　情報サービス課長（宮崎医科大学教務部図書課長から）
青山　弘　（情報サービス課長）名古屋大学附属図書館情報サービス課長へ
兵頭和子　情報管理総務係（教育学部庶務係から）
熊丸アキ子　（情報管理課総務係総務主任）経済学部庶務係庶務主任へ
大沢晴昌　情報管理課受入係（情報サービス課閲覧係から）
堂迫妙子　情報管理課受入係（情報サービス課閲覧係から）
河本香代子　情報サービス課閲覧係（情報管理課受入係から）
藤本房江　医学部分館閲覧係（宇部工業高等専門学校庶務課図書係から）
田村紀見子　（医学部分館閲覧係）宇部工業高等専門学校庶務課図書係へ

日　誌

1月22日（月）－2月27日（土）　古地図にみる「東南アジアと日本」展
2月21日（水）　第8回学術情報センターシンポジウム（京都国際交流会館）
3月2日（金）　平成元年度附属図書館職員研修会：国文学データベースの利用について
講師　国文学研究資料館
教授　安永尚志
4月18日（木）－19日（木）　第38回中国四国地区図書館協議会総会（高知）
4月19日（木）　第17回国立大学図書館協議会中国四国地区協議会（高知）
5月10日（木）　工学部分館図書委員会
5月17日（木）－18日（金）　第61回日本医学図書館総会
5月28日（月）－6月30日（土）　文明開化期における「英学書・独学書」展

編集
発行　山口大学附属図書館　〒753 山口市大字吉田1677－1　☎（0839）22－6111　内線788